

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「耳鼻咽喉科」

信州大学医学部耳鼻咽喉科・頭頸部外科教室

品川 潤

信大医学部入学時、私は脳外科志望だった。当時、メディアで“神の手をもつ脳外科医”と謳われた福島孝徳先生に熱狂的に憧れた。「立派な脳外科医になって、誰も救えない患者を自分が救いたい」そんな幼さの残る夢が、6年生での実習で、それこそ本当に夢幻に変わってしまうことになるとは、当時は微塵も思っていなかった。

6年生時に行う実習は、アドバンストクリニカルクラークシップ=アドクリと呼ばれ、診療科の中から3つだけを選択し、1か月間集中的にその科の疾患、診療について学ぶ。アドクリでの経験が将来の道を決定づけることも少なくない。当時の私は耳鼻科医になるという将来は、ツチ骨の幅ほども考えていなかった。ただ5年生のポリクリで2回飲み連れてもらい、アドクリで耳鼻科を選べばまた飲み連れて行ってもらえるだろうという邪まな気持ちで選択しただけだった。

アドクリでは担当症例が学生各自に与えられる。私の担当することになった患者さんは80歳前後の老婦人だった。重度難聴であり、人工内耳手術を受けるために信大病院耳鼻科へ入院してきた。最初の顔合わせ、緊張しながら自己紹介をした。「学生の品川潤と言います」…返事がない。当然だ。人工内耳の適応になるほど聴力が悪いのだ。筆談で同じ内容の自己紹介をする。ほとんど愛想もなく、はいはいよろしくね、といった感じで追い払われてしまった。後から先輩の耳鼻科医に聞いた話では、難聴を患っている方は他人と

のコミュニケーションを取りたがらなくなる方も少なくないとのことだった。数日後、無事に人工内耳手術は終了した。この時点ではまだ私の心は一切動いていなかった。ただ手術を見学しただけだった。

そして、3週間の時が流れた。人工内耳は手術してすぐに聞こえるようになるわけではない。創部が落ち着き人工内耳をスイッチオンする「音入れ」まで約3週間の期間を置く。私はその音入れに立ち会い、その様子を傍観した。音入れを行う部屋に入ってくる老婦人。傍から見ていてもその緊張がこちらに伝わってくる。「本当に聞こえるようになるのか…」そんな心の声が聞こえてくる「全然聞こえなかったらどうしよう…」

いくつかの説明を言語聴覚士さんが筆談で行った後に音入れへと移った。「では、スイッチオンしますね」『パチッ』

パソコンのキーを叩いた瞬間だった。患者さんが驚いたように大きく目を見開き、そして集中するように再び目を閉じ、ゆっくりと口から言葉がこぼれてきた。「ああ…先生、聞こえます…嘘…夢みたい」涙まじりにそんな言葉が聞こえてきた。私はその姿から目を離すことができなかった。何年、いや、何十年ぶりに彼女の耳を通り脳に届いた音は、彼女は勿論のこと、横で見ていた学生時代の自分の心、いや、魂と呼ぶ方がしっくり来るかもしれない、つまり私の内面を大きく揺さぶり、撃ち抜いた。私は、その衝撃に圧倒され、ただそこに呆然と立ち尽くしていた。その時、隣にいた宇佐美前教授が私の肩をそっと抱き声をかけてきた。「いいか品川、命を助けることだけが医者の仕事じゃない。耳鼻科医は患者さんの第二の人生を作ってあげられるんだ」この言葉を聞いた瞬間、私の人生の道筋が定まった。『耳鼻科医になりたい』心の底からそう思った瞬間だった。(信大平25年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

## 「脳神経内科」

信州大学医学部内科学第三教室

星野 優美

もともと目指す夢があるために医師になりました。そのため医学部に入学し、教養課程が終わり医学を勉強し始めた頃、何科になろうかと焦っていました。その中で脳という謎めいた組織に魅力を感じました。というのは私が私たる意識はどこからくるかということ私の稚拙な頭で考えると脳からくると思っているからです。

しかしながら、興味とは裏腹に学生時代、脳神経は苦手な分野でした。脳、脊髄、末梢神経、神経筋接合部、筋と脳神経内科の疾患は範囲が広く、神経内科ハンドブックはめちゃくちゃ分厚いです(ご存知の方もいると思いますが)。脳波、針筋電図、末梢神経伝導検査といった神経生理検査は難しく特にわかりません

でした。

そんな私が脳神経内科を選んだ理由の一つに長野赤十字病院での初期研修があります。脳神経内科の矢彦沢祐之先生と担当した30代の男性で突然意識障害をきたした患者さん(原因は今でもわかっていません)がきっかけでした。当時、疾患を診断することはできませんでした。脳という組織は現代医学でも病態がわからないことがあり、それに対して医者として真摯に向き合い、患者さんや家族へ寄り添う姿に感銘を受けました。憧れる先生がいる科に入るといふなんともミーハーな理由と脳に対する興味から私は脳神経内科に入局しました。

入局してからは脳神経内科の医師には様々な選択肢があると思いました。大学病院で研究、地域の病院での患者さんの診療、脳血管障害を専門としたカテーテル治療、リハビリテーション、訪問診療など自分の人生に合わせて自分の役割を選ぶことができることも魅力だと思います。

(信大平26年卒)